

宮城野  
志乃婦  
繪本敵討白石話

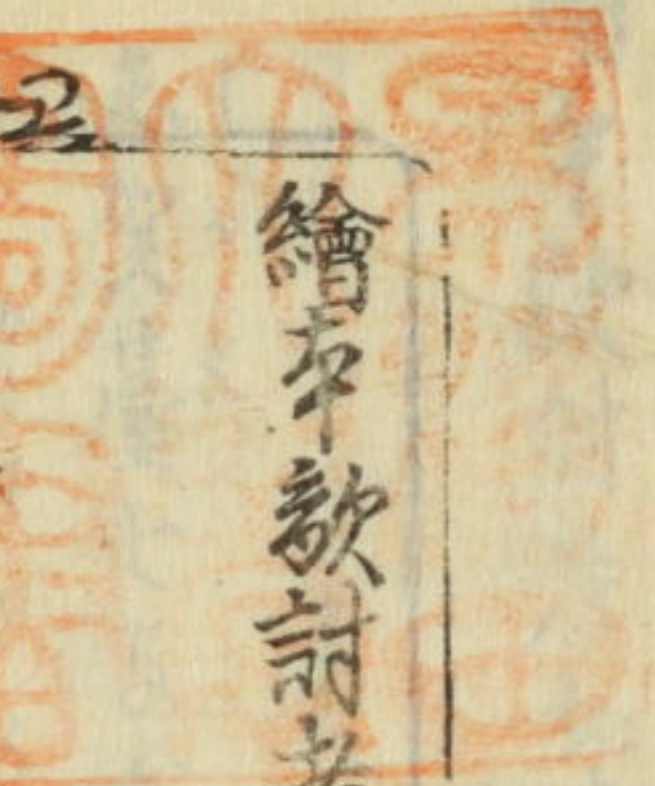
一

13  
3306  
1



八 12  
3306  
卷 1

繪本歌討孝女傳卷之七



尾流

志賀基七と後代を斬奉

足利家御室所御不乃屋

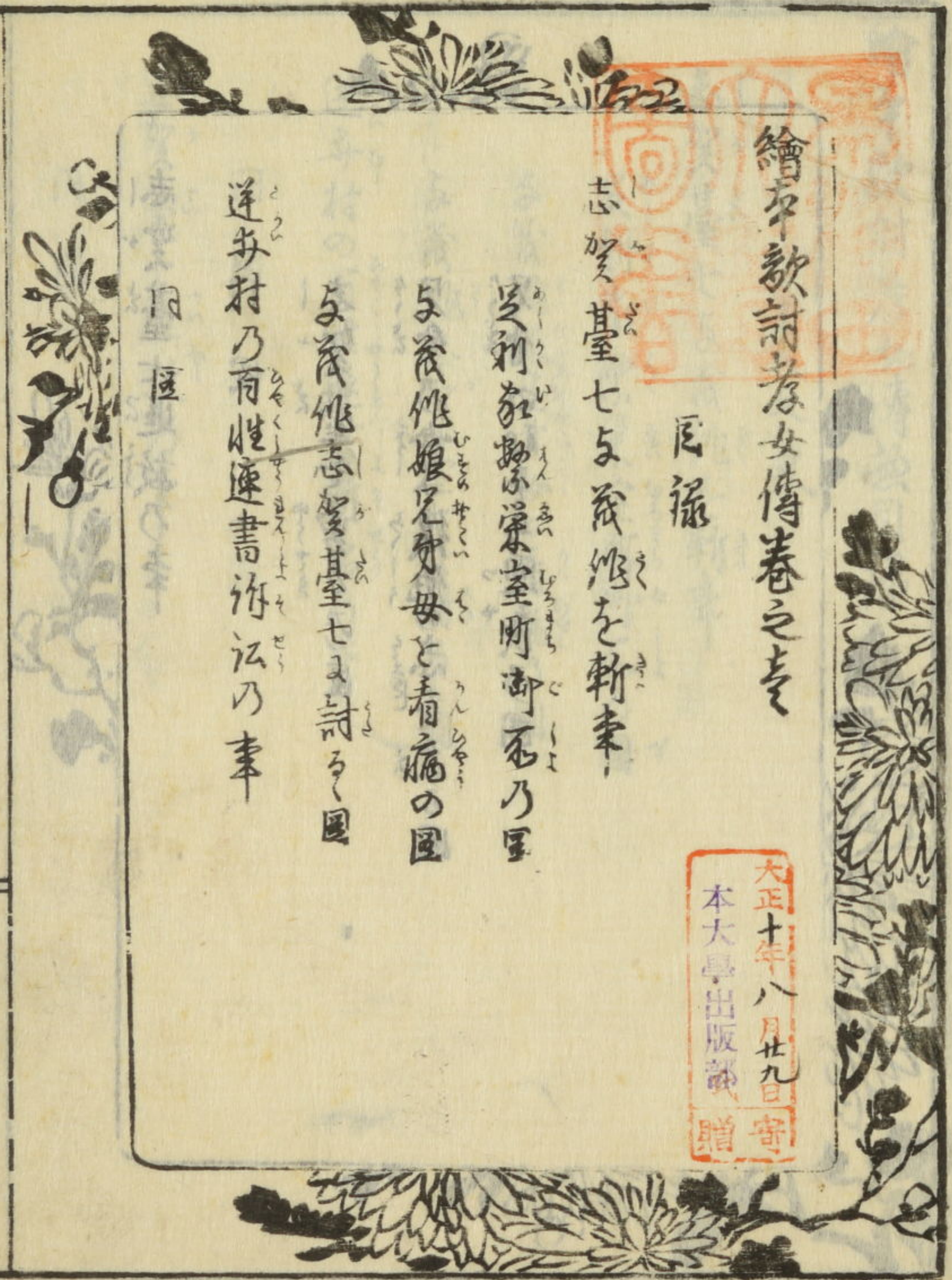
と後代娘兄弟母と看癒の屋

と後代志賀基七と討る屋

逆井村乃有性連書海江乃奉

志賀基七の奉

大正十年八月廿九日寄  
本大學出版部贈



志賀基七進放乃幸

日 區

志賀基七勇力乃區

兄弟乃女子後仇の士心を立る國

兄弟の心と通候乃國

繪平款討考女傳無目録

又賀の七 志賀

志賀基七よ茂他を斬幸

足利家御宗室町所不乃國

与茂他娘兄才母と看病乃國

与茂他志賀基七と討る國

送舟村の百姓連書所乃幸

日 國

志賀基七進放乃幸

日 國

志賀其臺七勇力乃國

兄牙の女子後仇の志と立らる

兄牙の娘通彦の國

二之卷

七郎玄清が男子三人乃事

兄牙の娘服礼田國を新入國

右八放湯丸碎乃國

右八次郎おきのよとむ國

兄牙の女子都へ登る事

日國

二女織乃ちよ又若めらるる事

日國

孝女山織乃ちに漏る事

終女が屬下旅人を惱む國

武者後乃ち中て宿りと需る國

孝女織乃ちに漏る國

三之卷

二女雅と適る事

山織酒真乃國

武者後乃ちの旅人盜織と斬る國

奇縁婚をりし事

武者修好者足牙の女を芳里都へて國

のふ女宿乃をよみて酒客と調る國

奇縁婚とる國

倭友体内が事

体内夫婦お纏乃方と看病の國

体内が妻身を若思又沈んとする國

金江谷五郎体内と相成り國

12之卷

若女身を若思又沈る事

日國

清水親世音靈現乃事

富士民之々靈後乃國

若女富士民之々又見國

宮城野全聖乃事

日國

乃自宮城野を説く國

侃唱妓を具して子歳か沖よ事國

都乃花小國の楓が事

宮城野松ひ乃國

宮城野花と机を何人國

又之卷

宮城野款基七よき入り

之八乃主宮城野が病を女抱とる國

宮城野花へお奉と送る國

宮城野若果をゆか奉

机宮城野が国門を何人國

郭乃持若儀別乃國

若持忠新狼藉者と討國

之のふ勇力乃奉

日國

富士民之女海宅乃國

勢乃目貫款乃在石を若奉奉

田村又右邊門月費と見取國

六之卷

全に若又即系へ登る子

勢の命と賜る國

宮城野志野婦着途乃奉

日國

志賀基七松への奉

志賀其墓七石串家に於て用きの圖

墓七ヶ門分中身淺の圖

宮城野志賀新編

日圖

惣目録終

繪本款討孝女傳卷之三

志賀其墓七百姓と茂地を斬幸

家よ奉朝人皇百有一代後小松院乃御宇明德三年足利の  
 權勢日み盛んはしく南朝僅み五十余年こそ天下一統と  
 一武お足利義滿公系都は政勢を執せ給人ハ此の海嶽  
 此の武万歳とうとうさしハ南朝は使をりし新田捕らふ縁と  
 首め云甲斐のさきと人ぐの武士まぐ殺て政をさし出ひ者も  
 或は之と棄て農と強さうの交易を業とし高き如に名分埋  
 りあり榮枯地と習盛衰あるこそ世乃分野といひさう  
 口惜うりし財運方りき捕心儀は居は故本其内と云し武士あり

足利家

聚楽園

室所

の

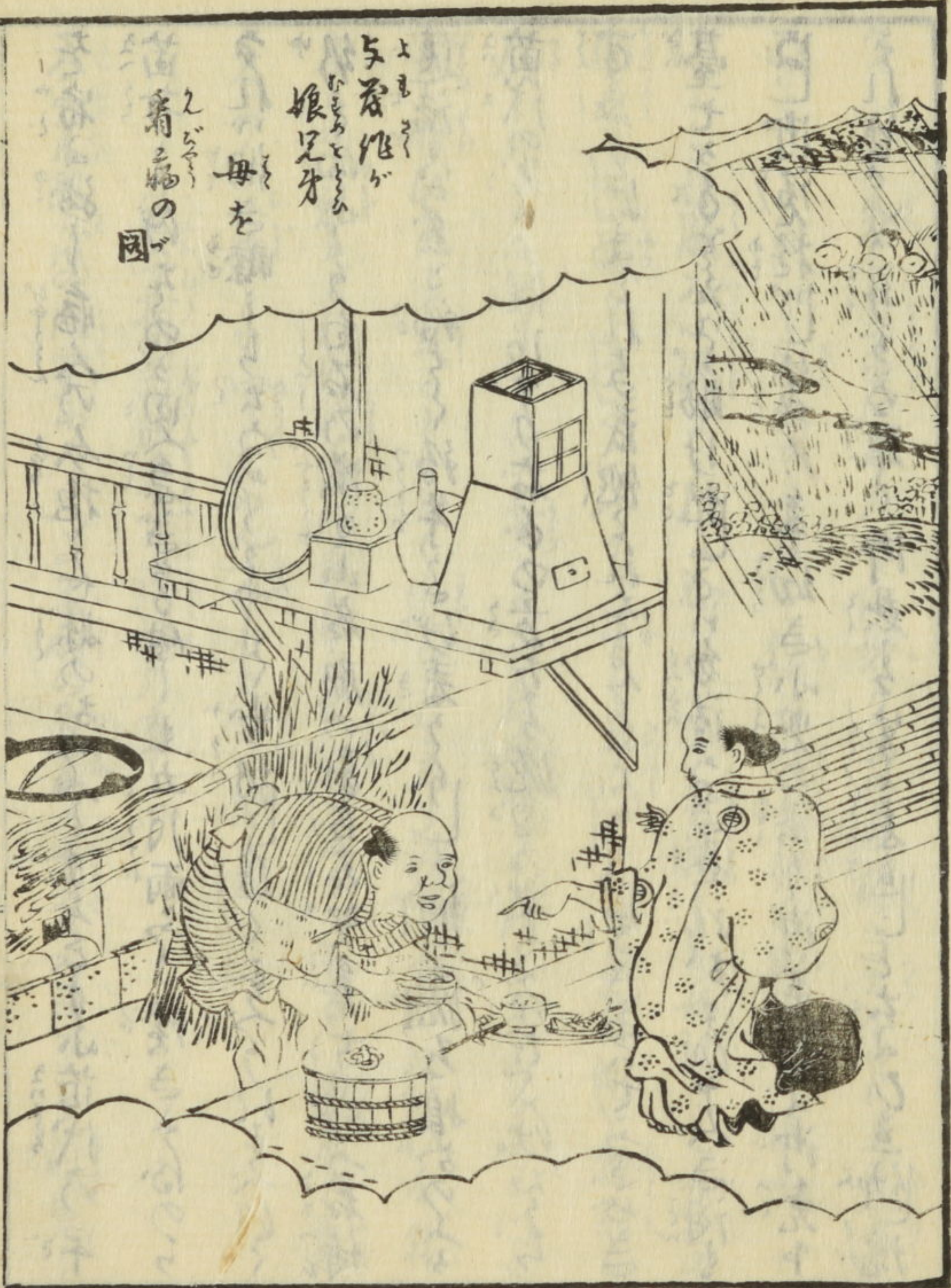
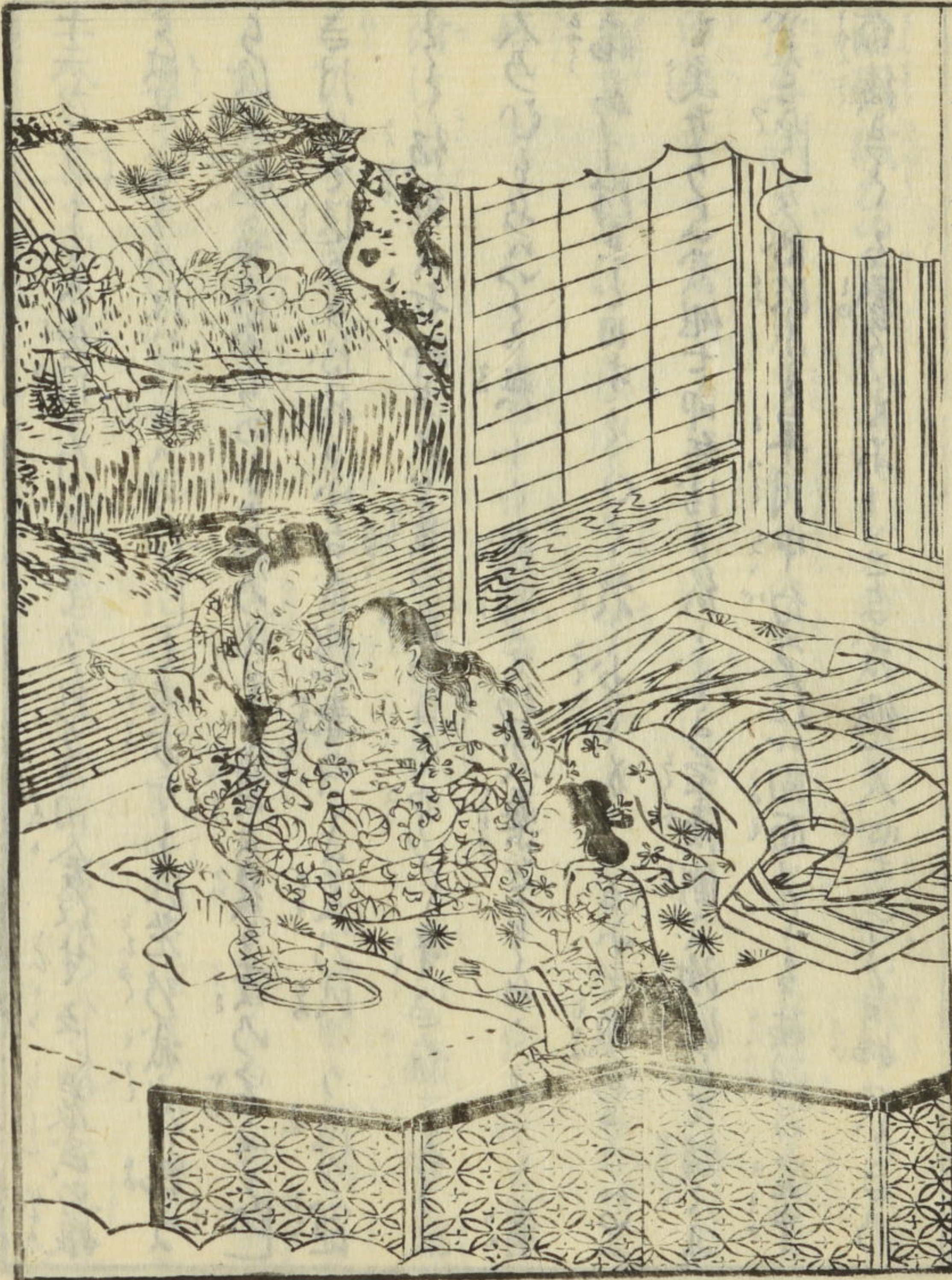
圖





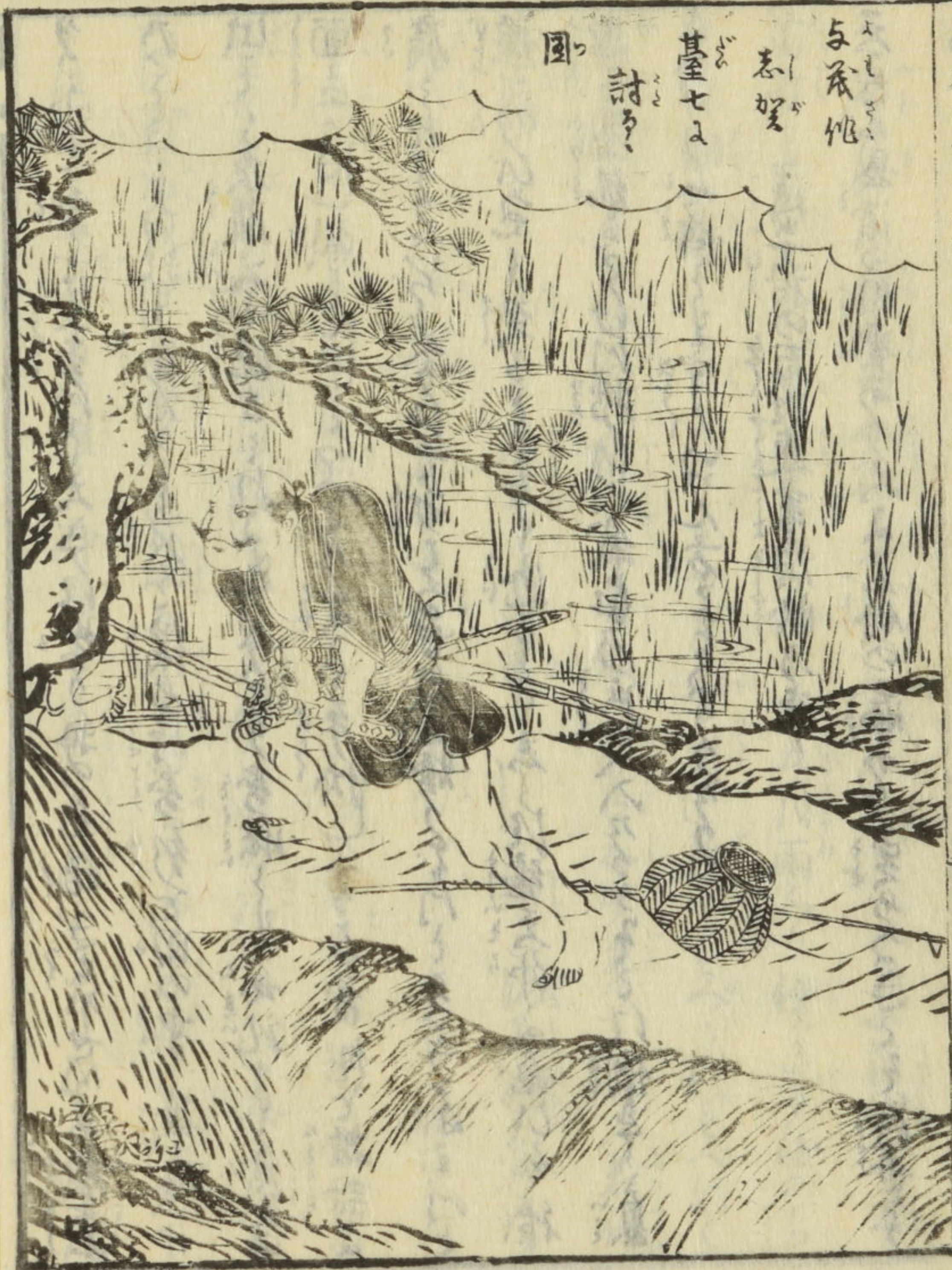
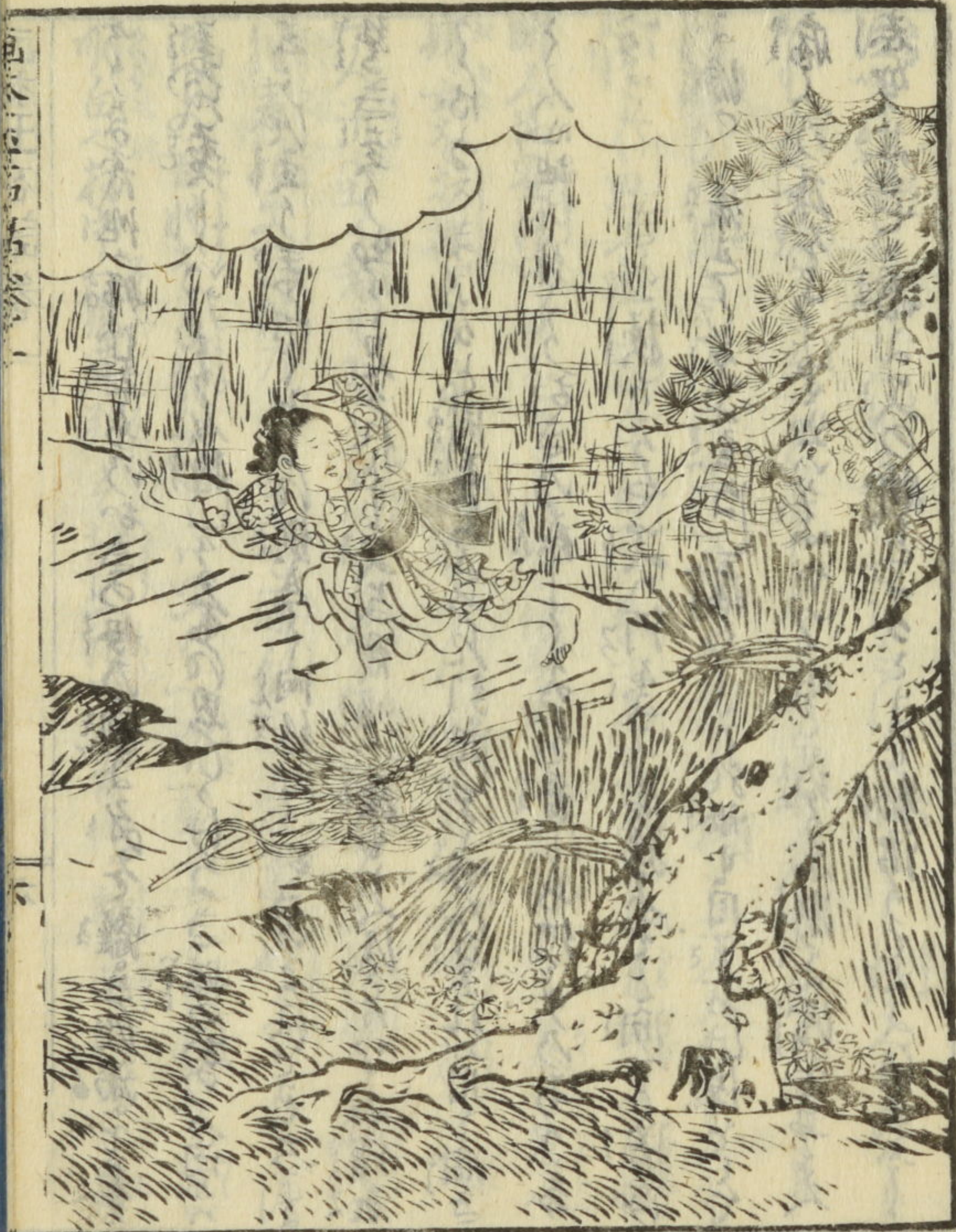
南朝賦その後少し乃たよりみく陸奥國白石の城にらうき  
 送舟村に佐五瓜定め終身の田畑を需め名も与茂他と改免  
 田植まうり乃言又身をこり「妻」き月日をあうりうけ村の  
 辰吉七郎兵衛と茂他が素生正一きと人とありの由方うみで  
 姉とよと茂他又妻世のやうなりゆき何事と心と  
 附け神に「二百姓のりあ」ぬは貞親との調ひゆうとも是  
 よく安く世ととせんとする程ゆいゆいと茂他は他得もま  
 くぬりお身とにぬ附る叔夫婦と睦しくゆりも「耕芸材  
 と送り妻をひくやくと十に又年乃星霜を経たり二人かゆよ  
 二人の女子あり姉は十に名瓜きのとらふ妹は名瓜のふとゆんでま

十二よりともみ受同うりくしをくぬりう田舎に生は「農武の娘  
 とは乃くさうりタルは父母のつれくしと大方方」此老幼我身物う  
 らび只娘が抄いぬらのをたのしき「若くはるまの宿まじい」  
 き月日を送り々体強ふと茂他が妻のさよ妻乃以り風の心地  
 とく「仮神又お那々れが夏のゆめ又そ中く「身さ「病」ぬり二  
 人のむとあいつと悲しく「医師をひく入薬ととらここく「看  
 痛ぬ」はとと目をうきく「教」かくぬりうふと娘うりゆいゆ  
 も交方うと茂他七郎兵衛のゆとも「昼夜側」は附添ひて「種」ゆ  
 心を「居」るゆいゆも「早」月中向うは「田」面く「木」附の「中」  
 白後まてくも登りもふく「とよ茂他一人心を」ら「姉」のかきり



よもぎ  
とる  
娘  
母を  
着  
着  
の  
園





人  
と  
他  
志  
基  
七  
討  
多

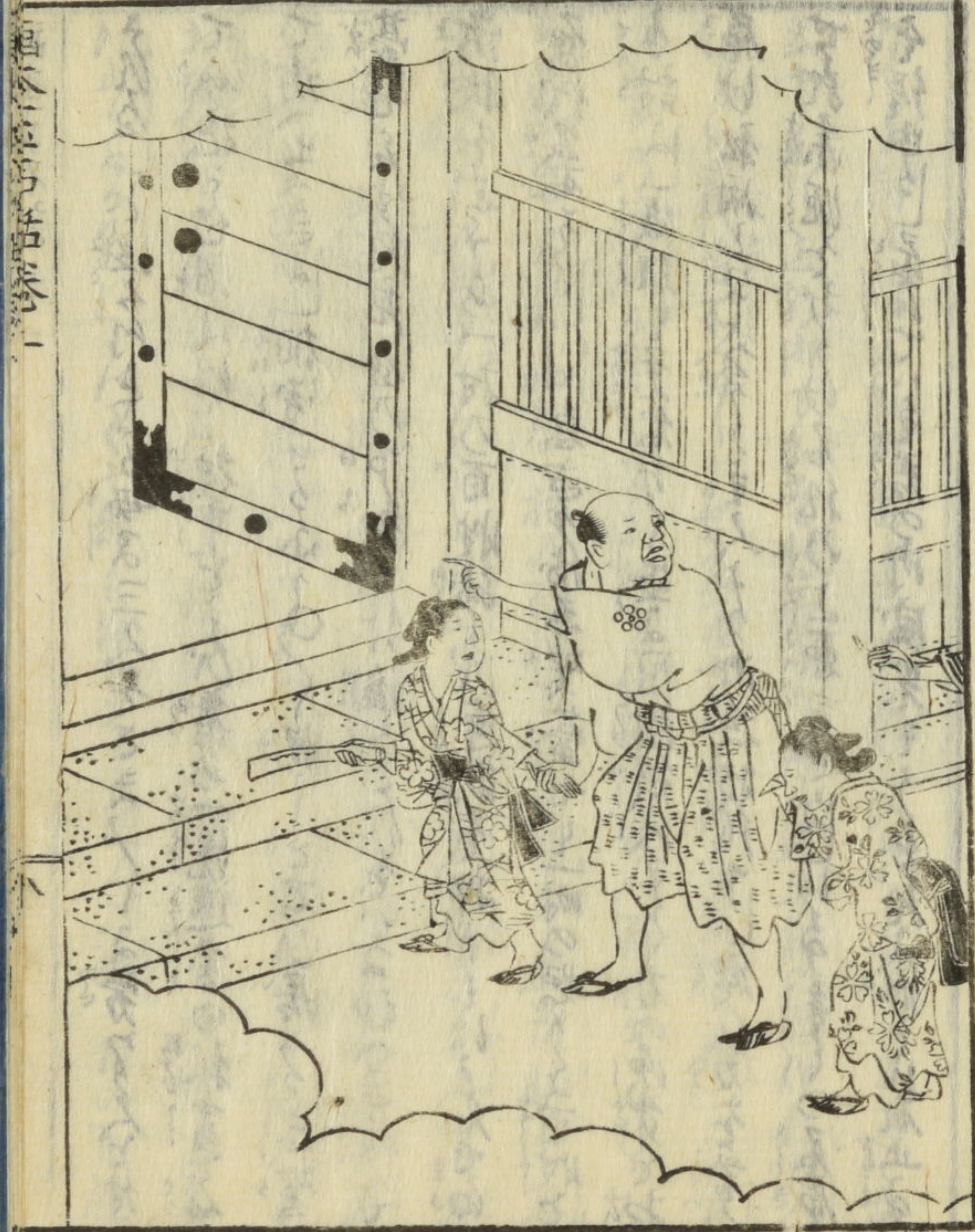
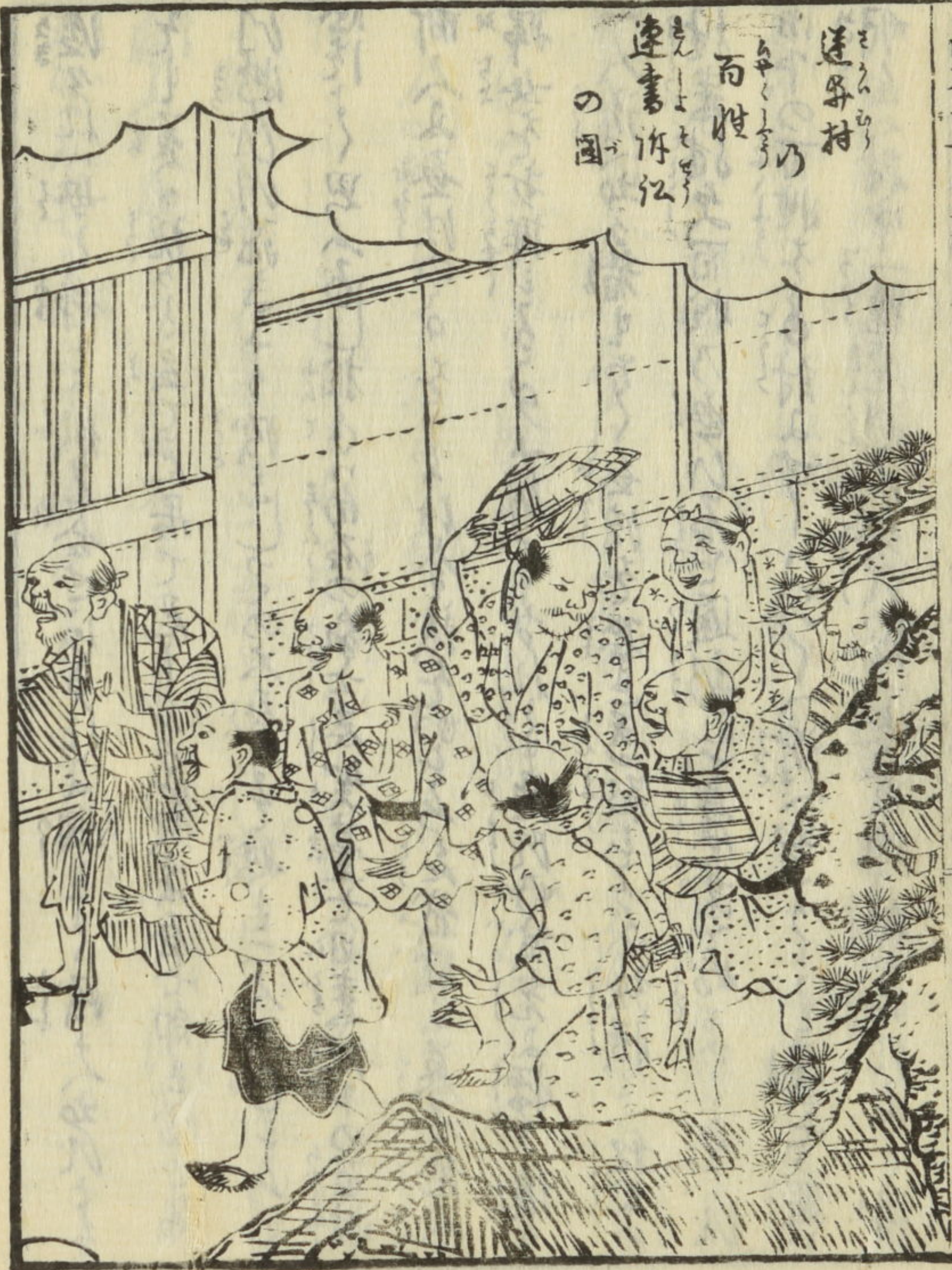
西本五石言

五

たりよみ我他婦むとありおきの母の側より子を離して溺とて着  
 美瓜着すといれより女抱しつるを思ひつけらるる妹のおのへ何れ  
 去りて去りまはれりてこれ例きて同終せりおきのこれとてん去り  
 驚き走りゆく見られども父と我他婦もさへこれいつか何れ  
 うはわとまはれりと周妻ふとされ引脱して吸ひせれり目と用き  
 く人心地を付りておきの森へくを吾れ何れなりありあ  
 りてはしきみか換方うや又い何れよ居終ふぞと何れと落しけ  
 り涙の流るる涙とて又いまはし痛ふては母も目覚めけ侍とて  
 痛ふの麻をうやせいふやつやとあふるふ湯を流すを扱ふ人  
 志賀其を七つぬよ又の物とてうとまと物語りておきいひとふ

後々れい母と婦とい顔見合せりおきには惘とて涙をぬりて  
 そと着り現うとて立て見居て見りては又衣屋七郎を湯とあ  
 の物ひの弛きうう涙まじりての天をうと妹と二人乃むとあも  
 心はよく思ふに相ひの白石の志賀其七日来地下の百姓  
 所人よ我法ののをやうけ金銀をかともを我威も養ふ老人  
 婦女を扱擲とるるゆゑにうれも地元の風光は輝り惟  
 一人所へ出る若れりて我法を思ひて教とるふ強腰 松用の  
 往來結文百姓乃ぬひると通知して農業と坊ろのりか  
 西下の百姓を討よせりいつて一折へ出たりとて其七が罪ハ  
 明白に村中一統連判とて地元の仁と我他が教は必にえり得

送子村  
百姓  
の國  
連書海江



夫の由とほくのさる母又三人をとまづくは勞り人と付  
 て女抱ふを強うへりて村中とよび集め一統連書の乳業を  
 て海へ出さば相済むるふりのく勝るとおひ居りて志  
 其七をまたたを登り下りて誰れこれをいさむべきに  
 所狀をさす一村の百姓跡に速刺を押しこめて  
 石の代安をさし急ぎ志賀墓七と一時の怒りて百姓と  
 討は後獲りて赤方く奥に同附殺入りて石の代安をお  
 届け私用と申す人より所接持成りし候い刀を夢  
 せぬ糸源を打ちし不れ乃と悪言と返しりてその不届  
 を恨めし居りて居る君の所感光りてとれたはゆるし

かく討は岐山後所希とほしく殺し入しと母のがよきま  
 中始り上乃所下知を結帯すり時と送舟村の百姓教百人  
 ひとく代安を申すを居登七郎を湯と養他が娘二人と  
 是より乃所狀をばしりて村方仕死乃教人百姓多むむひ  
 其の意の中多りの海等一村の百姓中合せ来りて所狀と恐  
 るるるすい曲りてりて一係さるる教書の振きり人の所  
 又遣り双方とよと追りて出り乳明をみさきり今日を  
 立立しと養他が死體及び乃とら只今倍倍長き及間見  
 お海よりと勝りてを悪つて居りしとの所よりと所狀の所  
 此より多り是れより七郎を湯ととめ二人乃娘一村の百姓

志賀

墓七

白石を

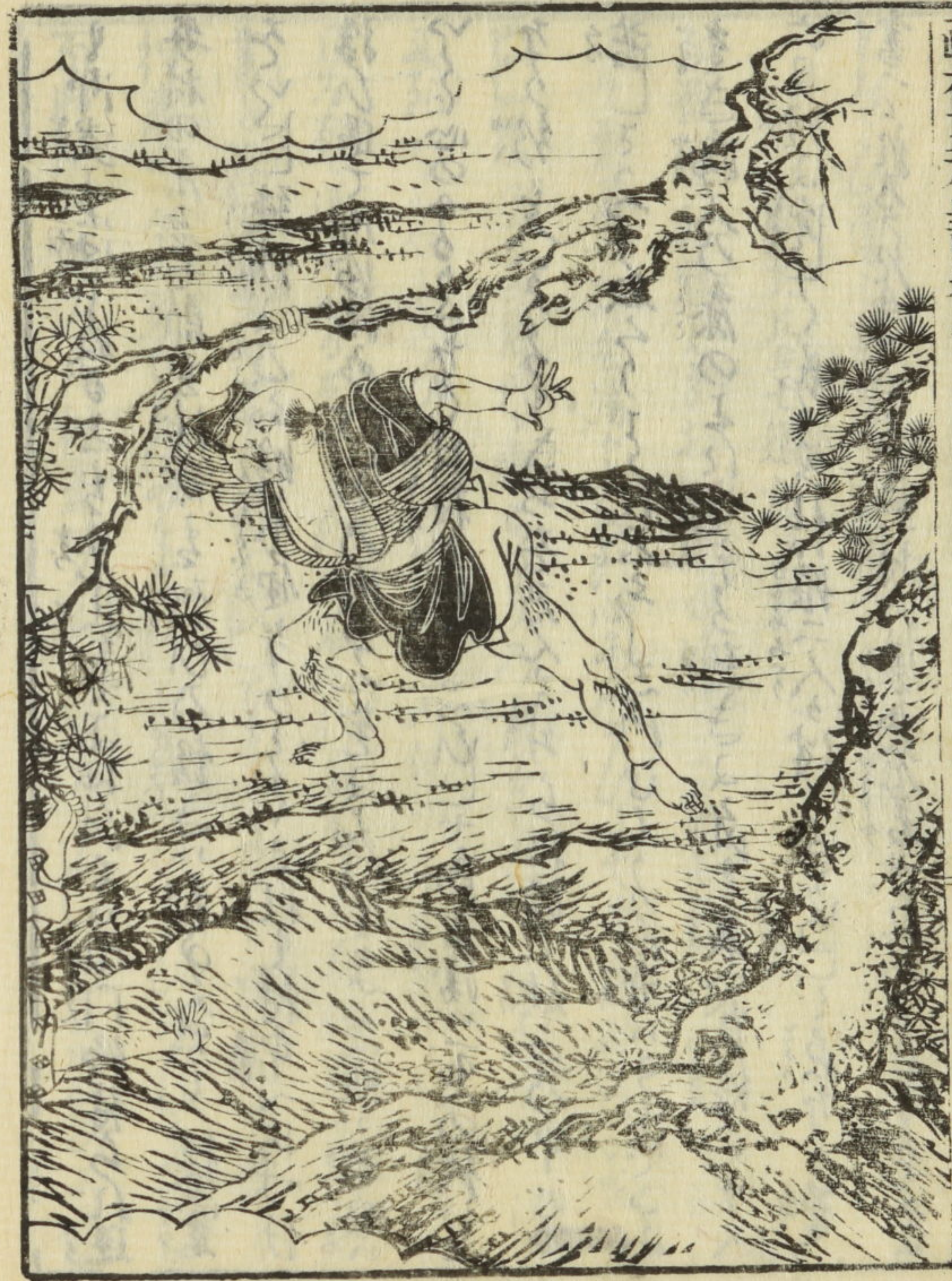
返放

四ら

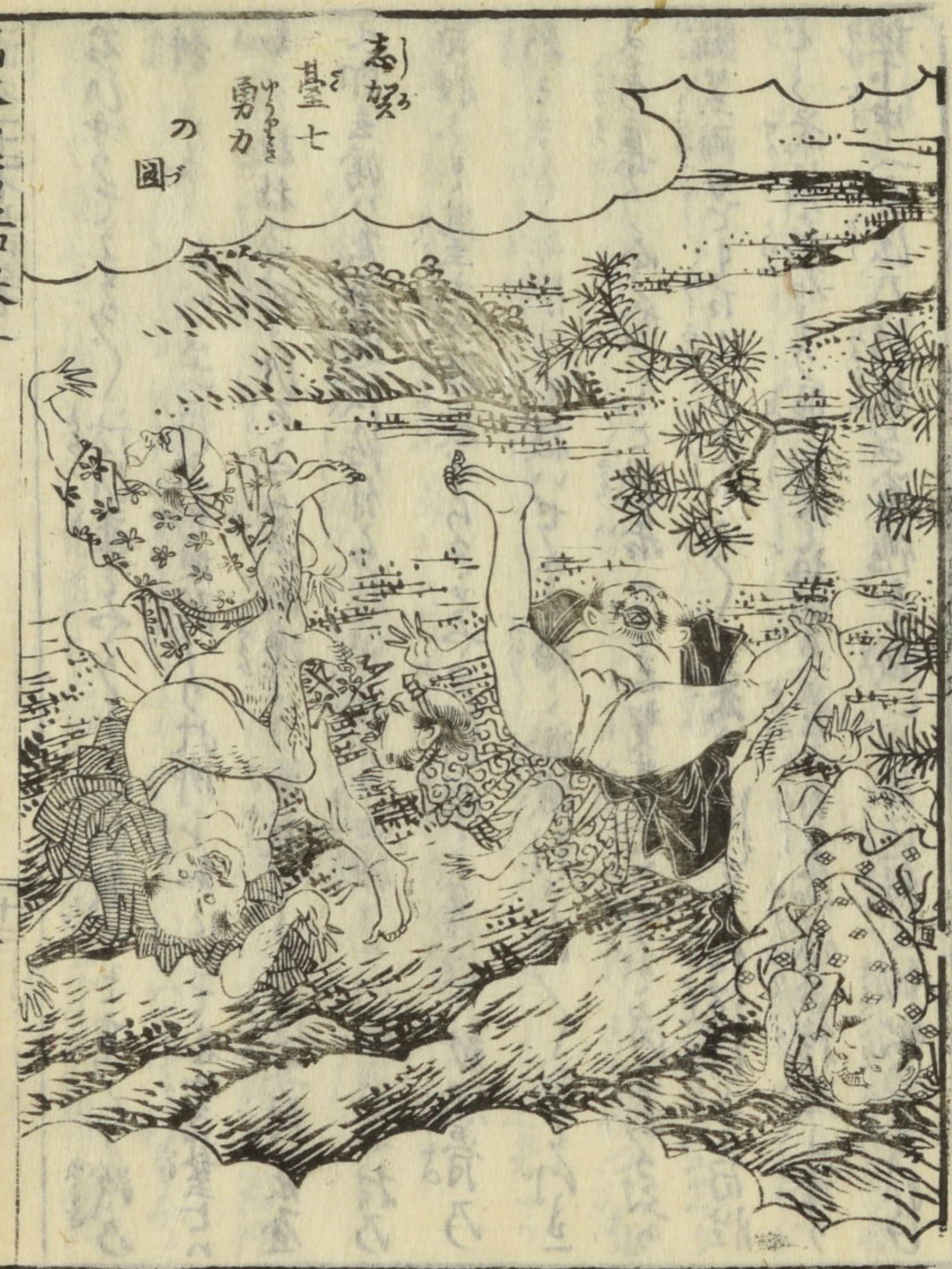








志賀  
基七  
の  
勇力  
の  
圖



日本石上言卷一

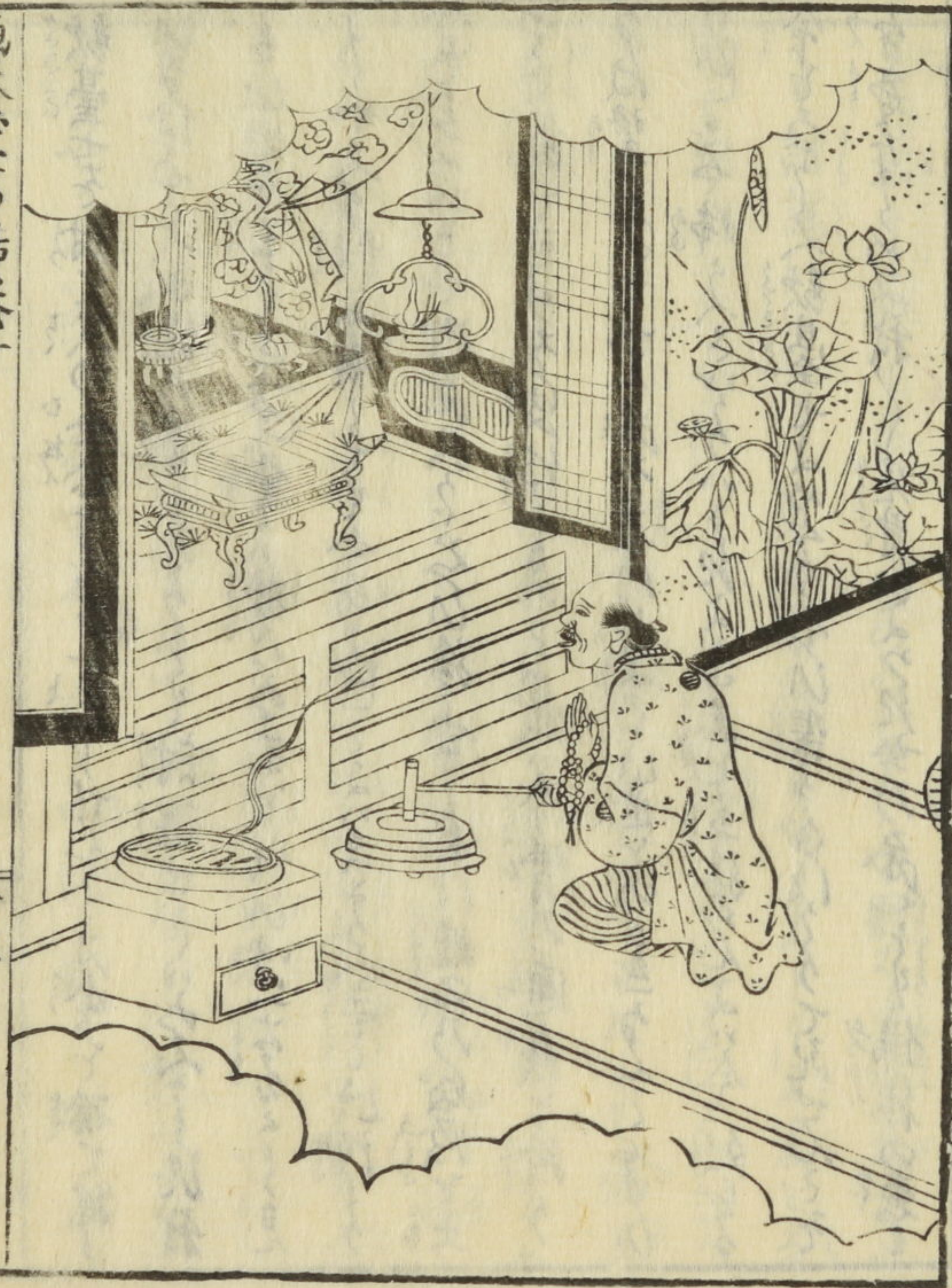
おひかりてまろく、訪ひ来とやうくとつひ願ふをやりく、後乃  
 種といふ、松村は六月上旬地改より北河下知として志賀基七に  
 知多様持方おぼしむるより、國境より退放せしむ、送兵村を  
 七郎と清いを退放せしむれば、一件もおぼしむ、村送兵村の  
 百姓も、基七が退放せしむると、日頃の恨と、義徳が腰骨乃  
 折るまじく、お例して後いせん、終、惣惣引さし、村をいさ  
 又考集り、今やくと、結居より志賀基七の今ど、必、又まろふ  
 編笠、両刀と、おとよ、まろくと、まろくと、まろくと、まろくと、  
 なる、若、後、左、右、より、退、去、せ、し、む、母、の、も、基、七、日、来、河、下、の、持、威、は、清、り  
 地下中、一、法、乃、妙、法、と、後、他、を、殺、し、は、返、報、は、惣、惣、の、ま、ま、い、は

腰骨は、おひかり、と、一、度、よ、と、い、と、お、て、う、う、基、七、元、来、別、勇、を、  
 双、乃、大、兵、と、お、し、は、美、法、流、乃、御、術、乃、造、人、を、い、心、得、し、う、と、ま、ろ、  
 又、く、侍、は、ま、い、う、る、も、ま、ろ、れ、核、の、本、根、より、う、う、と、引、換、く、一、ま、ろ、  
 又、人、三、人、ま、ろ、く、と、お、例、せ、は、こ、い、叶、い、と、百、姓、も、お、お、は、し、  
 勢、い、つ、ら、う、中、凡、よ、本、の、系、の、教、を、う、う、人、は、い、ち、く、お、お、は、し、  
 基、七、と、ま、ろ、い、お、お、は、し、と、方、は、し、て、よ、り、う、う、  
 又、弟、乃、女、子、後、繼、の、志、を、ま、ろ、奉、  
 う、ま、ろ、の、我、乃、の、ま、ろ、種、り、妙、月、日、も、ま、ろ、は、十九、夜、を、後、他、  
 の、ま、ろ、う、れ、い、と、お、お、は、し、七、郎、を、清、が、方、引、さ、し、し、又、乃、中、法、も、今、  
 清、と、清、い、は、佛、若、に、香、華、を、お、お、は、し、弟、乃、清、い、は、佛、若、を、お、

う、ま、ろ、の、我、乃、の、ま、ろ、種、り、妙、月、日、も、ま、ろ、は、十九、夜、を、後、他、  
 の、ま、ろ、う、れ、い、と、お、お、は、し、七、郎、を、清、が、方、引、さ、し、し、又、乃、中、法、も、今、  
 清、と、清、い、は、佛、若、に、香、華、を、お、お、は、し、弟、乃、清、い、は、佛、若、を、お、

唱へ曉ましく通病はしと座とあちく居たりたるふも七郎は情  
 表とて悲ひうて物よ香を搦つて老若も白髪打たりし風  
 鞠くるともまよとて泣くそは又泪のこ涌出ること理りあり  
 き鞠は飾りて七郎を清足翁の娘と向いぬるまよく父母とまひ  
 よに懐くちくちくも懐くまじこれ先の世より仕因縁定じ  
 物忠より今勅又出来たりはしとあしきこせしは先このれ  
 つがこの花乃初と入つちり学人をうんともあつた今この秋  
 きた世にたるとりまひはし冷たれたるまひめんよの黄泉も逢ふ  
 父母の懐に射つたまはしきとどく我をれとどし心なぐり成長  
 をたどしと福んごうに望むるふも二人の娘いよと涙の止む難く

ろ一拜してのこ居たりたるも三更の待し御着き候とハハハを  
 とく七郎は清き神衣に入りぬ足牙意佛して夏夜の涼のいこ  
 だらう又足元りひきありし又姉のかきの中かやうい又のまはし  
 南朝の深居世に唄へるき楠家のお居板本基内とて弓の本  
 末とて知つる武士ありしは世にいつく結しき農まごめり  
 たり石原の若乃もい合とまひ泣くそよんうらむき河原の  
 深いう斗り憂意にや泣くやんとそれのこ悲しくもあつた我と  
 そあつた二人のまも持後とてつひ甲斐なまき女のみたると人後  
 こがれて死たりとて又正乃娘とていおちまはし又能くもあつた  
 へ女とてくも一念乃矣い若孤と通はし使侍れは足牙意と合せ



兄弟の女  
通文の國

